ウォーシップガンナー2 蒼き鋼の少女達

榧陸戦隊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウォーシップガンナー２　蒼き鋼の少女達

【Ｎコード】
Ｎ０７２７Ｍ

【作者名】
榧陸戦隊

【あらすじ】
ウィルキア帝国の崩壊から一年後の１９４１年１２月、自国の超兵器を開発、保有が出来ずに焦ったアメリカは、９．１１事件を口実に大戦中の超兵器を保有していた日本帝国と東西ルイーズ王国に宣戦布告を行い太平洋戦争が勃発した。
１９４２年、前大戦での反逆罪で投獄された赤城四郎中佐は、山本五十六大将から、海交警備会社のハイブリット超兵器艦で編成された遊撃部隊の指揮を依頼された。
そして、彼らと超兵器の補助部品として生かされ鋼の運命を背負っ

た少女達の航海が始まるのであった。

第一話　帰艦

１９４１年１２月１日
２３時４０分
米国は、日本帝国ならびに東西ルイーズ王国に対し戦布告をおこなった。
理由は、前大戦で保有していた超兵器の引き渡し拒否とアメリカの旅客機が反米テロリストによりジャックされ貿易センタービルに突入事件の報復であった。
数で圧倒する米軍、しかし当初の予想は、裏切られて一年が過ぎようとしていた。
１９４２年１１月　呉海軍刑務所
牢獄の扉が開く
「囚人１２５番、赤城四郎、面会だ」
呼ばれた男は、看守に付き添われ面会室に入る。
そこには、連合艦隊司令長官、山本五十六大将がいた。
「長官！？」
赤城が言う。
「やあ、赤城君」
「元気そうだね」山本が言う。
「ええ、おかげ様で」
赤城は、微笑む。
「君たち、少し席を外してくれ」
山本は、人払いをする。
「赤城君、今の対米戦は、微妙な局面を迎えている」
「３月３日のトラック諸島沖海戦で勝利し、戦線をサイパンまで縮小させたが我が国の工業力は、アメリカとは、比にならない」
「このままでは、艦艇と兵士をジリ貧し負けるだろな」
「海に戻る気は、有るかね？」

「赤城中佐」
山本が言う。
「長官、今の私は、軍籍を剥奪された反逆者ですよ」
「軍令部の連中の事は、気にするな」
「君塚の傀儡だった。奴らの方が反逆者だよ」
「それでも私は、多くの同胞を殺しました」
「兵たちは、自分を受け入れないと思いますが」赤城が言う。
「そのことは、心配ない」
「君には、海交警備社の遊撃部隊の指揮を頼みたいと思っている」
山本が言う。
「海交警備社？」
「上の天下り先の会社ですか？」
赤城が尋ねる。
「バカ者、水交社と一緒にするな」
「海交警備会社は、俺と米内さん、井上君、伊藤君、豊田君で創設した民間軍事会社だ」
「日本海軍とは、別の指揮系統の準軍組織でアメリカが把握していない勢力だ」山本が言う。
「スサノオと言われた君に実行部隊を率いて欲しい」
「わかりました」
赤城は、承諾する。
「それで、私が乗艦する艦は、なんでしょか？」赤城は、尋ねる。
「勿論、君には、別れた妻と寄りを戻してもらうつもりだ」
山本が言う。
自分のあだ名は、スサノオ、古事記でのスサノオの妻は、クシナダヒメだ。
戦艦クシナ、自分が前大戦で艦長をしていた艦で自分がスサノオを呼ばれている理由だ。
「今、クシナは、どうしていますか？」
赤城が尋ねる。

「今は、横須賀のドックで改装中だ」
「工事完了と共に出動してもらう」
山本が言う。
山本は、書類を出す
「陛下の特赦状と入社の手続きの書類だ」
赤城は、書類にサインをする。
四日後
横須賀海軍基地
「やあ、待っていたよ」
「赤城少将」
山本が出迎える
「長官」
「自分の階級、高すぎませんか？」赤城が言う。
「それは、君の部隊が呑み込まれないようにするための処置だよ」
二人は、ドックに迎う。
「どうかね？」
「二年ぶりの妻は？」
山本が尋ねる。
「大分印象が変わりましたね」
「艦橋が長門型から改大和型に変わっていますね」
「武装も６５口径４１センチ三連装から６５口径４６センチ連装」
「両用砲が１５．５センチ連装砲から２５．５センチ連装電磁砲」
「対空兵装も増設されてありますね」
「前部両舷に何かありますね」
「それに、中央部に上下左右に稼動する二個のレンズの付いた小型のドーム状の物がありますね」
赤城が言う。
「あれは、対空レーザー機銃だ」「高度５００メートルをマッハ２で飛行する航空機を１００キロ手前で撃墜できる」
山本が言う。

「レーザーですか！？」
「そのような物、超兵器機関でもないと」
「まさか？」
「そう、そのまさかだよ」
「赤城少将」
山本が言う。
「日本の保有する超兵器は、全て宣戦布告直前に米海軍の奇襲でトラック諸島沖で沈み」
「機関も終戦後に活動を停止していたはずでは、ないのですか？」
赤城が尋ねる。
「沈んだのは、超兵器機関を取り外した、ただの殻だ」
「このクシナに搭載された超兵器機関もアラハバキ級２番艦アマテラスに搭載されていた一番機関が流利用されている」「クシナは、超兵器ハイブリット戦艦に生まれ変わったのだよ」
山本が言う。
「しかし長官」
「超兵器機関は、どのようにして動かすのですか？」
「マスターシップは、北極海で爆沈していますが」
赤城が言う。
「１９３０年、私が左遷人事のとある研究機関にいた頃にウィルキアから極秘に、ある機関の制御ユニットの開発を依頼された」
山本は、語りだす。
「しかし、その制御ユニットは、実用化は、大戦末期の頃のハワイ防衛戦からだった」
「そして、最後に任務は、ヴァイセンベルガーのウィルキア脱出の囮になることだった」「その制御ユニットは、マスターシップが無くとも超兵器機関を一定時間の稼動を可能にするバッテリーにもなる」
「しかしそれでは、シュルツ大佐達の理論を根本的に覆すことになります」

赤城が言う。
「君ならどうするね？」
山本が尋ねる。
「自分でしたら全て処分しますがね」
赤城が答える。
「君を選んだ理由一つには、その制御ユニットの中身を知ったら君は、そんな事は、出来ない人間だからだ」
「二つ目は、絶対な力を手に入れても私欲に走らない男であること」
「三っ目は、高い指揮能力と人望が有ることだ」
山本が言う。
「今の私には、人望なんて有りませんがね」
赤城が言う。
「真実を知っている者には、有るさ」赤城が尋ねる。
「中身を知ったらとは、どうゆう意味ですか？」
「きたまえ、中身を見せよう」
山本がクシナのＣＩＣの制御室の鍵を開ける。
そこには、自分が乗艦していた頃には、無かったユニットが増設されていた。
そして、もう一つの扉が開く。
そこには、多数のコードが繋がった椅子が有り誰が座っていた。
そこは、外を全周囲３６０度を見渡せる全周モニターに仕切られている部屋になっていた。
「調子の方は、どうかね」
「ヤシマ特務大尉」
山本が尋ねる。
「調子は、良好です山本長官」
そう言って被っていたヘットギアを外した。
赤城は、驚いた。
「こ、これが制御ユニットの中身！？」
そこは、１２才前後の少女が座っていた。

続く〜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0727m/

ウォーシップガンナー2 蒼き鋼の少女達

2010年10月30日19時52分発行